

No. 5

1985

9 月 1 日発行

萩の郷

発 行 者
下 市 田 区

発行責任者
林 直 輔

印 刷 者
飯田共同印刷株式会社



納涼盆踊り大会

夏の夜を楽しく過ごす納涼盆踊り大会を八月三日夜、下市田公民館広場で開催した。

当日は連日の猛暑の中で心配された雷もなく、子供からお年寄りまで大ぜい参加し地元民踊をはじめ交通事故防止の願いを込めた「交通安全音頭」等も加え、大変楽しい盆踊りとなった。

民踊の間にはカラオケや子供花火大会金魚すくい、そのうえ綿菓子・ジュースなどのサービスもあり、地域のコミュニティにふさわしい行事となった。



最近の下市田区の 情勢について



きびしい暑さですが皆様お元気ででしょうか。長雨の後日照り続きと大変な夏でした。

今年は区でも大きな問題が二つ解決しました。明治以来の出砂原借地も二回に亘る開放であと一筆を残しました。

熱意と役員の方々のお骨折により町から関係の皆様にも所有権が移りました。区と致しまして感謝申し上げ皆様の益々の発展を心より期待致す次第であります。

次に六地藏前の土地裁判も皆様に大変ご心配をかけたり、又色々協力を戴き五年余の歳月を頑張つて参りましたが、そのかいあって良い結果が出ましたがこれもその間に証人に出られた方々、証拠の資料を提供してくれた方々には心よりお礼申し上げます。

それから区の古文書の保存状態が良かった事、その古文書を一枚一枚丹念に調べ十数点の証拠書類を発見してくれた方々等多くの人達の協力が勝訴に結び付いた。

たものと確信致します。

裁判は高裁へと持込まれましたが、以下経過を述べてお礼とご報告と致します。

一、出砂原 土地売却

昭和五十七年出砂原借地組合の方々(日通を除く)

より、その借地を買受けた旨の申し出があったので、区では特別委員会を作り、慎重に検討した結果、売渡すことに方針を決め、その後約一年間に渉って両者の交渉が続けられ昭和五十九年八月に漸く合意しました。

その内容の概要は次の通りであります。

買受人の数 四七
土地の筆数 五一
土地総面積 一〇、五七四・五七㎡

売買金額(底地のみ) 二〇三、八三九、〇〇〇円

これに基いて高森町では昭和六十年三月の議会が必要な手続を終え、町と買受

人との間で売買契約が成立し、五月末日までに一切の取引が完了しました。

尚、この土地代金については、高森町の条例によつて高森町の下市田地域振興基金として積立てられることになり、基金の管理処分について次のように規定されています。

(基金の管理)

基金は金融機会への預金その他最も確実かつ有利な方法により保管しなければならぬ。

(運用基金の処理)

基金の運用から生ずる益金は町の予算に計上して下市田区に交付する。

(基金の処分)

下市田区が下市田振興のため特に必要がある場合は町の予算に計上して、基金の全部又は一部を処分して下市田区へ交付することができる。

(交付金の使途)

下市田区が基金より受ける交付金は、次の目的に従つて公正に使用されなければならない。

1. 下市田が行う公共的事業
2. 町営事業の受益者負担金
3. 区の運営に要する経費

以上土地売却の経過を申し上げましたが、買受けた方々の益々の発展と基金の適切な運用による下市田の発展とを期待してやみません。

二、六地藏前土地 裁判経過

昭和五十五年以来

原告 高森町

被告 宇佐美不動産(有)

の間で五年間に渉って争つて来た下市田二九三一一の裁判は

裁判の回数 三一回

書証(原告側) 五九件

証人(原告側) 七人

のような経過で審理されて来ましたが、去る七月十一日、地裁飯田支部で次のような判決が言い渡されました。

判決

主文

一、別紙 物件目録記載の土地は原告の所有であることを確認する。

二、被告は原告に対し、右

土地について所有権移転登記手続をせよ。

三、被告は右土地について原告の占有使用を妨害してはならない。

四、訴訟費用は被告の負担とする。

判決理由(要旨)

1. この土地は不動産登記簿の記載にかかわらず、松島仙太郎ないし松島将公の所有であったとは認められない。

2. この土地は、江戸時代より昭和三十四年の間、下市田村・市田村、又は原告が占有したと認めるには十分でない。

3. しかし、昭和三十五年この土地に原告が鉄骨製の火の見やぐらを建築して以来、消防器具置場及び藤棚を一体のものとして、平隠且つ公然に所有の意志をもって占有していること認められるから、遅くとも昭和五十五年十二月三十一日の経過をまつて右土地の所有権を時効取得したといふべきである。

中略

原告が被告に対する本件土地が原告の所有であることとの確認、右土地の所有権移転登記手続の履行及び原

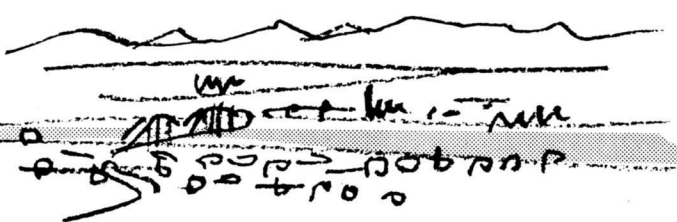
告の占有使用の妨害排除を求める本訴請求はいずれも理由がある。

よつて、原告の本訴請求を全部認容し、訴訟費用の負担について民法八九条を適用して、主文の通り判決する。

以上

尚この件について被告側は控訴しまして来る十月三日東京高裁において第一回の裁判が行なわれる予定であります。

(誤解を避けるため努めて原文のまま記載しました)



萩山神社ものがたり (5)

——幟について——

伊谷唯介



お宮の祭にたてる幟^{のぼり}について調べている中に次の文章に出逢った。それは民俗学の第一人者柳田国男集第二十一巻「祭礼と幟」の項の「千駄焚き」や「祭礼と幟」の中に、

「幟は夏の初め秋のなかば、村へ入って行く者の気づかずにはいられない最もさわやかな快い印象を与えるよい見ものであるが、是を祭の日に立てるようになってきた起りはまだ考えて見た人が無いらしい。

私の意見では最初一つの高い木の柱を立てる習慣があつて、夜はそのついでに火を点じ、昼は又目じるしの白い布を附けたのが後々あの大きな二幅三幅の堅旗となり、その布の上に、「天下太平」だの「国土安

全」だのの文字を書くことになつてからそれがよく読めるように片側に乳を付け綱をとおし終に今見る形になつたものと思われる。」

また、平凡社の百科事典「幟」の項には、

旗の一種、上部と側面に乳をつけそれに横上の棒を竿に通した長旗を云い、観応年間（一三五〇〜五二）ごろの軍用書に長旗とか幟指物などの文字が見えるが、この頃から武士の間で用いられたことがわかる。これが江戸時代になつて五月の節句の幟となり、また神社佛閣或は相模・芝居又は商店などでも用いるようになったと云われている。

ただ、軍用の幟は乳を左側、一般の幟は乳を右側につけるのが違いである。と

春祭には正面向かつて右に「豊年穰々」の幟、左に「敷政優々」の幟を立て、秋祭にはその逆に立てるとしている。

さて、その幟の文字のことであるが、前記のようにすばらしいの一語に尽きる大文字である。

豊年穰々 降福無疆

穰々（穀物がよく実るさま）降福（長者から物を授かる）無疆（はてしがない）

（大意）

穀物は大豊作でこの郷に天の恵みは限りなしと云うほどの意か。

（出典がわからない）

敷政優々 百禄是道

敷政（祭事をほどこし行う）優々（心の広いさま）百禄（多くの幸、たくさん）

の扶持

（大意）

心広くまつりごとを行うので多くの幸がこの郷にあつまる。これが政治の道であるといふほどの意か。

（出典）

出典と云えるかどうか解らないが、中国の有名な五経の一つである「詩経」の中の「頌」の「長発」の中

にこれと同じ句があるが、最後の（是道）が（是道）となつてゐる。これは時の王様である湯王は人と争ふこと無く繰急でなく、剛柔相済して政治を布くことは豊かで和らいで居るので多くの福祿が聚まつて来る。という意味のようだ。

最初にも書いたようにこれが出典と云えるかどうかわからぬが参考迄に書いてみる。

なお、「豊年」の幟には

昭和五十二年四月再調

明治十五年四月三日

京都 海雲貫名正祁書

また「敷政」の幟には

明治十五年四月三日

京都 無名海雲正祁書

と書かれている。

この大幟を又えている幟枠には

明治十二年卯年第三月

火消組築造

と筆太に彫られている。

下社の幟はどうなつたかただ、立派な幟枠は残つていて、若連中、嘉永三年庚戌八月吉良日の文字が読める。

萩山神社春祭り詠進歌

幼児の可愛い手振りのいや
芽えて桜咲く宮に獅子曳き
まつる

勝又恒一

大般若の読経に和する獅子
の音の久々なれば心おどる
も

串原喜代枝

獅子舞を納めおわりてほろ
を出でし人の横顔上気して
おり

福島光三郎

祭ばやし習うざわめき聞き
ており春の夜風に身を委ね
つつ

伊谷富貴子

久々に祭囃子の笛の音の澄
みてぞ渡る荒神の森

加藤清敬

おごそかにそそりて立ちし
霧島の社は雨にそぼちて清
しき

田戸純一

参道の松のみどりは芽へわ
たり獅子ひく児等のひとみ
かがやく

藤松定子

連翹の花を写して水温み

酒井 伝

白鳥はふたたびを来ず冬は
去り萩山の郷は祭りとなり

平沢忍夫

小春日や菊の香匂ふ祝ごと
吾子にこやかに祝膳につく

木下しも枝

手離せる孫の風船萩山の宮
尾の空の青に溶けゆく

中村まさ子

（次号へつづく）

クラブ紹介

(5)

下市田美術クラブ

山 本 脩 平

「好きこそものの上手なれ」という言葉がある。

私たち下市田美術会は、むろん、上手になることも大切な目標の一つである。が、それよりも、絵を描くことが好きで、描いて楽しむ、といった風情のグループである。

生い立ちは、昭和五三年で、下市田公民館のクラブ活動の一つとして呱呱（ここ）の声をあげた。当時は上沼正清先生が館長で、指導者に松川町教育委員会の松下拡先生を頼んでくれたりして、生みの親となっている。

発足から三年ばかりは、水彩画だった。

水彩画は、かつて、小学校での経験からして、簡単に入門できるが、どっこい、そう易々とはうまく描かせてはくれない。楽しむより

むしろ、苦しんだ。

昭和五六年から、油絵に移った。

油絵は水彩画とは、全くその手法を異にする。最初、絵の具をカンパスの上に落とすことが、なかなかできなかった。水彩画の勉強が邪魔になった、といったら過言かも知れないが。

油絵の手ほどきをしてもらってから二年ぐらいして、都合で松下先生は辞められた。そして、後任として、上市田在住の英朝華先生にお願いし、現在に至っている。

会員は、現在、十一名。

男四、女七であり、年齢は三十代から六十代までと巾が広い。しかし、平均年齢は六十歳ぐらい。

毎月、第二・第四曜日の午後一時半から夕方まで描くことにしている。うち



一回は英先生のご指導を、あと一回は自習である。

毎年、最低一回は、勉強とレクリエーションを兼ねての一泊旅行を行なっている。

すでに、中電ショールーム展示二回実施。その他個人で、タブロウ展などに出品をしている。

下市田旅を楽しむ会

野麦峠を尋ねて

六月七日、下市田旅を楽しむ会で、飛騨の製糸工女が往還した、野麦峠を尋ねました。桂・松・榎・榎・榎の木が生い茂った原始林を抜けると、一面の笹原でした。明治初頭から、昭和十二・三年頃まで、十二・三才の少女が、血と涙で通った峠道、お助け小屋、政井みねの碑、思わず合掌せる風

短歌 野麦峠

田 戸 純 市



は晴れて、残雪が眩しく輝いておりました。

五区大正琴グループ

木 村 勅 代

と、楽しい曲、また苦労して覚えた曲色々な思い出が秘められています。

一退、なかなか上達できず先生に申しわけないと思っています。大勢の人前で発表するということは、なかなか大変なことです。これも勉強と励み合って公民館の発表会、町の行事にも参加させていただき、また

年に一回、小島・佐々木両先生の教室の人たちが一堂に集って一年の成果を発表するのですが、その時は他

。雪残る乗鞍山の晴るる峰仰がる今日に想い極まる
。これもまた思い出にせむみねの碑と乗鞍望みし峠の
。昼餉は

(六〇・六・七)

の町村の人たちとも交流が
でき、年毎にお心安くもな
ってきて楽しい一日です。

最近グループのメンバーも
変わってきて、三十才代、
四十才代の人たちもお仲間
入りしてくれ、一層活気づ
いてまいりました。私たち
は、もう一つ幸いな事に先
生が大正琴以外に広い知識
を持っておられるので、ち
よっとの休憩の時にもちよ

一日の仕事を終えての稽
古はなかなか大変ですけれ
ど、グループ八年の年輪を
大切に、皆が仲良く、
たゆまぬ努力で大正琴を弾
いてまいりたいと思います。

グループ代表 林秀美

外 十二名

史跡めぐりシリーズ (5)

○惣兵衛堤防について

一、飯田藩と献策者

はじめに 天竜川にかかる明神橋の南方、約一キロの西岸に桜の古木と、大きな石の供養塔がある。ここは下市田村大川除堤の一部で、僅かに当時の面影を留めている。

この碑についてはあとで紹介するが、築堤工事に献身した石工頭、中村惣兵衛を讃え、その菩提を弔ったもので、地域の人々は一般に惣兵衛堤防と呼んでいる。宝暦二年十一月に完成した堤防は、暴れ天竜をよく押え、下市田をはじめその下流の、座光寺・上郷の村々の美田を守り、二百余年、その堅固さを誇ってきたが三六の大災害には遂に崩壊して二十年余、日々人々の記憶からも、忘れ去られようとしている。

当日の飯田藩

この堤防が築かれるに至った事情は記録がないのでわからないが、当時の領主は堀氏であった。堀氏の三代から六代までは、代々若死であり、世継がなく、他家から養子

塩 沢 尚 人

として、十才位の幼童を迎えたが、三十才を過ぎたころになると、病気で亡くなるといふ、不幸が続いたため、藩の政治はとどこおり出費もかさんだために、財政も窮乏していた。こうした窮状を新田開発により打開しようとして、下市田村大川除堤の献策したのは、黒須楠右衛門であった。献策は寛延元年二月というから、時の領主は僅か十才の親長であった。

黒須の着眼 楠右衛門はよほどの人物らしく、その着眼のすばらしさに驚嘆させられる。

○ 下市田村に築堤すれば、それ以南の座光寺・上郷など、広い地域の開田が可能とみたこと。当時天竜西河岸の村々では、相当面積の水田が拓かれていたが水害の度に流失して苦しんでいた。築堤すれば、これらの人々など、多くの協力者が得られるとみたこと。

○ 築堤に要する石材は最も手近かな台持洞(市田

駅南ひろせ袖工場付近)に無尽蔵にあること。築堤五十年ほど前の、正徳五年の末満水で大島川が氾濫して大量の土石が押し流され、今の出砂原ができていた。この時の犠牲者の供養碑などが、明照寺前に残っている。



S 36.6 月以前の写真

○ 築堤技術者としては当時飯田藩の御用で、いくつかの堤防を築き、その腕前に定評があった。石工中村惣兵衛が健在で、飯田に住んでいたということであった。

二、堤防工事の概要

計画と完成 計画……寛延元年十一月、着工……寛延三年、完成……宝暦二年二月(三十九年)
担当者 総括……奉行黒須楠右衛門、現場監督……小奉

行羽生金石衛門、庄屋……市右衛門・長左衛門・彦右衛門、組頭……卯左衛門・佐左衛門・平九郎・弥市右衛門
石工頭……吉田屋惣兵衛

大井の開さく 築堤工事と併せて、灌漑用水路も掘さくされた。これを天竜井とも間夫井とも呼び、堤防の頭から五百米の上部から天竜川を堰き入れ、水門の上手に放水路を設けた。井幅は狭い所で二・〇、広い所で三・六で、概ね上流は石積が多く、下流は土手で築かれていた。

(次号へ続く)

基標 上の亀甲石(出砂原・大島久男氏宅内)、天伯の森(出砂原・文松食堂付近)、畑中の塚(下市田二区)、下の亀甲石(下市田二区鎌倉芳五郎氏宅北)
基標から対岸現豊丘村の田村牧ヶ城、本原陣場ホウゲ頭を見通して、堤防の測量をした。

構造 (以下単位メートル)

。北部……長さ七〇・二、前後は補強されていた。上部幅一四・四、高さ三・六、底部幅一八・〇
。中部……長さ二八・八、上部幅七・二、高さ三・九六、底部幅一〇・六
。南部……長さ四五・八、上部幅三・六、高さ三・九六、底部幅七・二

石材と運搬

一箇の石の大きさは概ね、長さ一・八、二・〇、高さや幅は一・〇、一・五位の大石を、台持洞から最短距離の道を作り、竹を敷いてその上に石を乗せ、大勢の人足が掛声も勇ましく、現場まで引きずりおろしたといわれる。



随想

その周辺

北 原 喜代治

七月に放映されたNHKの銀河テレビ小説「父からの贈りもの」は、七月十二日最終回、行動的なミッシェン・スクール（慶応）の若手（齊藤由貴）が劇的な卒業後、吉岡家に自由に入入りしていた一人、小杉二郎の求婚を受け、父の深い理解のもとに演劇勉強のため、フランスに旅立つところまで終っている。

大正から昭和初期に少女から大人への成長過程を描いた原作者長岡輝子さんの自伝のドラマ化であるが、その後の実録の周辺をチョッピリ書きます。

それは私が四十八年前、このドラマの実録の周辺に密接な関係をもった時期があったからです。

今、周辺という言葉を使ったが、長岡輝子さんにも小杉二郎のモデルである、金杉又夫（惇郎）さんにも一度もお会いしていない。然し私が昭和十三年、東京神田の小さな出版社兼印刷所に店員として就職した時、まだこの出版社の名義人は

金杉又夫になっていた。とすれば輝子さんは主人の奥さんというわけであるが、この年三田系（慶応）の若手の演劇集団の同人月刊誌「劇作」が同人で前年急逝した金杉惇郎追悼号を発行している。

つまり輝子さんは昭和十二年、一児をかかえ若い未亡人になられた。その翌年この出版社に私は就職した次第で、その後名義人は兄さんである恒弥さんとなったが、実際の出資者は父君である当時の慈恵会医科大学学長故金杉栄五郎博士であり、日本医事週報を発行しており、啓明閣書房でもあった。

栄五郎博士の三男坊の又夫さんは、根っからの演劇好きで慶応商科の在学中から、水上瀧太郎氏久保田万太郎氏・岩田豊雄氏・岸田豊雄氏・岸田国士氏等（何れも故人）をリーダーとする演劇集団に属し、将来を嘱目される一人だったように、ドラマでは築地小劇場の試験におちたとなっていた

が、実際は新宿座のムラン・リュウの演出を振り出した、現在の新劇は暗過ぎると「輝子さん等同志とテアトルコメディを麹町内幸町の仁寿講堂を本拠に旗揚げするが数年で雄図空しく昭和十二年又夫さんは死亡中心を失った一座は解散する。先年物故された渋いわき役北沢彪さんはこの一座の出身である。輝子さんは昭和十四年文学座座員となる。

劇作の編集室の親があった事務所には、戦後NHKのラジオドラマで人気のあった「エリ子と共に」の作者で歌謡「雪の降る街を」の作詞家でもある菅原実（内村直也）さん、兄さんの菅原卓さん、杉村春子さんの当り役「女の一生」の作者故森本薫さん、劇作・演出の田中千禾夫さん（昨年叙勲）故竹口竹男さんや文学座の俳優さんも編集や校正に訪れた。

二十代三十代であった青年演劇人の方々も六十代七十年代となられたが、益々のご活躍を願っている。

詩

野 麦 峠

福 島 光 三 郎

今日は
六月の緑かがやく
芒種の日
仰ぐ野麦の峠辺りは青く
快晴である

このあたりより
亜高山帯
桂、樅、榎、榎の
大木が茂りあい
栃の木は白い花を
つけて居る

いまわしい戦争のあった
それよりも前もまえ
この峠道を
飛騨の娘たちは
あえぎあえぎ
二尺余の雪を踏んで
登り下りた

頭布をかぶり
荷物を横背負いにし
赤い腰巻姿
草鞋、脚判の足拵えで

その娘たちの
群の中には
十二、三歳の小娘も
雑っていた

貧しい山村の
生活を助けようと
生糸の国
岡谷の製糸工場で働く
出稼ぎの娘たちだった

その頃から、そして
いまも茂りあう峠道の
大木

花をつけている
栃の木などは知って居る
雪道を歩いた
娘たちの中に
政井みねと云う
娘の居たことを

苛酷な
労働の烈しい製糸工場
その不規則な生活から
結核を病み

故郷へ連れ戻されるみねは
兄の背板に負わされ
お助け小屋の上
故郷の見える峠の
上まで来て
『ああ、飛騨が見える
ヒダガミエル』
と言い乍ら
息を引きとった

雄大な雪山
乗鞍が眼の前に見られる
峠に
吉永さゆりは
政井みねの碑を建てた
飛騨の見える峠あたまで
いま
木々は青々と
その葉を茂らせ
みねの碑の前の草むらに
まいづる草
ごぜんたちばなが
可憐な花を咲かせ
くま笹の中
ささ百合が碑に向かって
花を開こうとしている
ここ野麦峠

(六〇・六・七)



自然を観る

木村喜久雄

わたくしども人間は、自然の一部であるということがよくいわれています。

また、そのことを自覚してこの世に生きられるのは、幸せな生き方をする人だと思われまふ。幼児から中学生頃までどうしても身につけたいことが、自然への畏敬の念であるといわれているのもこのためだと思われまふ。いわゆる自然界についての驚き。自然の神秘さに対し感動する心。これらを体験できる人はすばらしい生き方ができるということだろうと思います。

子どもの純心な目は、花が咲いたとき、美しいとかいろいろな自然現象に対して驚きをもってみられます。いつまでもこんなすばらしい目を保っていけば幸せな生活ができるのだと思われまふ。この純真な目や心を教養の力によって磨きつけていくことが、人生の課題なのだろうと思います。ところが、わたくしどもは、子どもの持っている自然を正しく観る目を閉ざしてしまうことがしばしばあ

ります。それは、子どもの感動に和して感動できないからだと思われまふ。わたくしどもはどうしても、子どもに知識を授けてしまいがちであります。

花が咲いているのを見て、も、あきれいだと感じる子に「その花は何科の何属の何という名前の花で、売ればいくら儲かる……」といったことを得意になって教えてしまいがちであります。

また、これは幼稚園で聞いた話ですが、デパートから買ってきて飼っていたカブト虫がみんな死んでしまった。翌朝、子どもたちがやってきて、動かないカブト虫を見て、「先生、先生、大変だよ。カブト虫が動かない。早く電池をとりかえて」と言ったというんです。これは笑い話に似ています。が事実でひどい話です。わたくしども大人の自然を重視する目のにがりが、子どもに移り、低年齢化してしまつた例ですが、自然への感動や動物への思いやり、そして一語に生活する喜びや涙がうすれてきていて残念であります。

自分を育てるにも、子どもを育てるにも、大切なことを育てるにも、大切なこ

とはすばらしい教材が今こにある自然現象へ目をむけることだと思われまふ。特に、日本の屋根といわれる山の中のこの地域には、文化施設は非常に乏しいが、幸いに自然の力は充満しており、人を育てる最高の自然現象を直かに感じられまふ。動・植物もいっぱいあります。この姿を謙虚に観ることから、わたくしどもは豊かに育てられるのではないでしようか。

欲のつっぱりと、自分勝手ないやな暗い面を少しでも美しいものに導いてくれるのは、この身近かな自然現象に学ぶことからだと思います。

人間様よノワイラも、もうちょっと大事にしてほしいワ。欲しい時には引掛けてはいて、はいて、要らんようになると彼所へ片っぱ、此方へ片っぱ。

。。。。。。
スリッパの
たわごと

。。。。。。
背広キツチ
リ、ネクタイ
バチンの紳士、殿方さん達が、ワイラかよいスリッパ族をはき捨て、ぬぎ捨て



三島 勤 end

。。。。。。
下駄も、靴も、そして、スリッパも、みな同じや。脱いだらきちんとそろえてな。たのんまっせ。

下市田二区生活改善セン
ター北側を通り、下市田河
原へ通ずる道路「通称下田
線」と、国鉄飯田線に、踏
切がある。この踏切は道路
と鉄道とが、斜めに交錯し
ているため、見通しが悪く
そのうえ、踏切も狭く、耕
転機だけしか通る
ことの出来ない、
踏切であったので
すが、数年前より
軽自動車だけは黙
認してくれること
になり、軽自動車
だけが気兼ねをし
ながら通っていたのであり
ます。しかし、誠に都合が
悪いので、何とかして踏切
を、広くしたいと云う気運

下田線踏切

拡巾と陳情の経過

が、関係者の間に高まって参りました。そこで、そのことを町へ諮ったところ、「踏切だけ広くする話は無理だ、道路の拡巾改良を先にし、道路も拡くなつたのだから、踏切も広くしてほしい、という話しにしなければ。」と云う、町の行政指導もありましたし、地権者のご協力と、関係の皆様

の熱意とご努力により、五十八年・五十九年と、二ヶ年の事業で、下田線拡幅改良工事を完了致しました。五十八年度事業で踏切の両側の工事が出来たので（五十九年六月頃かと思ひます）町の行政指導のあった通り、道路巾も拡くなったことでもあるし、踏切の拡幅と警報機の設置をしてくれるように関係機関へ運動をしてほしい旨の陳情書に一区・二区の方の全戸の方に署名して、区長、二区の町議、一区二区



一区二区

ところが今年の六月十二日、痛ましい踏切事故が有り一主婦が亡くなられました。誠に残念な出来ごとでありました。このような事を二度と繰返してはならないと云うことで一区二区全戸の方々に再度陳情書の作成をお願いし、今度は町へ一通、保線区へ一通、静岡鉄道管理局へ一通と同じものを三通作り、さらに区長、一区二区の町議と代議員全員で町長に手渡しをお願いをしてきました。二区生活改善センターから一区寺沢保治さん前の竜西線迄の拡巾改良の話が持ちあがっておりますので、これが実現されれば、下市田地区で唯だ一つの国道を立体交叉で通れる道となり、益々利用度の高まる道路となることはうけあいでありまふ。どうか下市田区の皆様の力強い御協力をお願いし、この踏切が一日も早く拡幅され警報機の付いた踏切となる事を祈つてやみません。以上誠に無細工ではありましたがこの踏切の経過について簡単に説明致しました。

家族と健康

中三 上沼 徹

が出来ます。
自分の体を常に管理して健康でたのしい生活を送りたいものだと思います。

家族というものは、一人一人が健康であってこそ、たのしく、そして充実した生活が送れると思います。僕の家族は現在六人です。しかし、全員元気で生活しています。兄二人は、高校を卒業して県外へ出てそれぞれの道を進んでいます。実際、家では四人で生活しています。おじいさんは、八十才近いというのにまだまだ健在です。僕をよくかわいがってくれます。ゲートボールをしたり、ときには天竜川の中へ入って好きな魚釣をします。本当に元気で。お父さんは、会社から帰ってくると、ときどきパチンコに出かけます。得しても、損してもこれで一日の疲れがいやされるので一番の娯楽となっている様です。お母さんは、家庭のために毎日の食事を作ったり、毎日毎日夕方まで働いています。僕も毎日好きなサッカーをやっているの、全部この「健康」が基準となっています。僕の家族はみんな健康なのでいつもたのしく過ごすことが出来ます。

ぼくが高森に来て

5年4組 宮 島 正 樹

も、部落も、友達の家もわかるようになり、ほうぼうへ遊びに行けるようになりました。そして、夏休みに入り、夏休みに入りました。

ぼくは、子供の頃の行事に全部出ました。いろいろな行事があり、知らなかった友達もたくさん知ることが出来ました。二期の時三区のソフトボールがありました。ぼくも、おとなの人にまじって、一球だけを守りました。すごく早い球だけど、はじめて、三区の人とやる行事だったの

小中学生
作文

キャンプ

四年三組 清水伸彦

今日キャンプに、おとうさんと、おかあさんと、ぼくと、妹で、行きました。そして、おとうさんが、清内路についたと、言いました。さっそく、つり道具を持って来てお金を出して、魚をつりました。おとうさんが今夜のばんごはんまで、しっかりつるとか言ったのではきつてつりました。

とび魚のバッチ

六年 北林 亮子

私は、四年生のころから水泳が始まると耳の調子が悪くなり、満足に泳げる夏がありませんでした。タイムもそのころは、みんなよりおそかったと思います。そんな時、泳力テストに出てとび魚のバッチをもらった人がいました。

私だって、という気持ちで私の頭の中を走りました。やってやるぞ。バッチに手ごとくようにと思って練習しましたが、タイムはまだ59秒だったのです。これじゃだめだ。少

きんぎょしかつれないのでおかあさんが、魚を買って来ました。それをやいて食べました。お肉とかも、やいて食べました。次は、ごはんのやわらかいおかゆみたいのを食べました。ぼくがやわらかいといったらおかあさんが、のぶさんようにしてやったと言いました。ごはんを食べ終わってから買って来た花火をしました。

しも早くなくてやろう。もう一度新しい気持ちで練習しました。そうしたら、42秒7というタイムが出たのです。目の前がバツとあかるくなりました。47秒きれば、泳力テストに出られるのです。まじめにやった練習がきいたのか？泳力テスト前には、苦しい練習が待っていました。泳力テストの当日は、自分の番がまわってくるタイミング、飛びこむとどうしようか、なんて思いながら泳ぎました。44秒88だった。あのとび魚のバッチがもらえると、うれしくてたまらなかつた。

×××

ほかの人が打ったのでぼくもおかえしみたいに打ってやりました。そして花火が終わったのでほかの人の所に入れてもらいました。そしてえんりょをしなくて、テントに行きました。そして、ねぶくろで、ね

編集後記



長雨が続いてうんざりしました雨が上ったら今度は暑い暑い今迄にあったこともない最高三十六度位もあったかと思われまふ。その暑さも盆が過ぎたら秋風が吹き朝夕めっきり涼しくなりました。区報第五号を発行することになり原稿を依頼いたしましたところ多勢から投稿いただきました。立派な区報ができました。ご協力感謝申し上げます。年末までに第六号を発行したいと思っておりますのでどうかご協力をお願いします。なお、今からお願しておきますが、次回から「下市田中で何でも一番」を掲載して行きたいと思っておりますので何でも一番と思われる方は名乗り出て下さい。